

研修報告書 No.26

研修先： 梶原病院

○県外在住医師から見た高知の地域医療の状況

高知県梶原町の中心地に位置する梶原病院にて、1 か月間の地域医療研修を行った。梶原町は人口約 3,000 人台、高齢化率は 40%を超えており、人口減少や高齢化が全国と比較して著しく進行している地域である。また、中山間地域・山間部が多く、医療機関への地理的アクセスが制限されているという特徴を有している。

梶原病院は周辺地域で唯一の病院であり、地域住民にとっては最初に、そして最後に頼る医療機関である。軽症から重症まで幅広い患者さんを受け入れており、常勤医師数は 4 人と限られている。そのため、一般外来、救急対応、内視鏡検査、訪問診療など、一人の医師が担う役割は非常に広いと感じた。また、入院する患者さんが急変し高次医療機関へ搬送する際には、最寄りの医療機関まで救急車で約 1 時間を要することから、初期対応を担う梶原病院の果たす役割の重要性を強く実感した。また、病院には保健福祉支援センターが隣接しており、毎週のケアプラン会や月 1 回の地域ケア会議を通じて、福祉・介護・行政と密接に連携している。これにより、外来や入院といった医療の枠を超え、地域住民の生活に寄り添った医療が実践されている点が強く印象に残った。

診療を通じて、患者さんと医療者という関係に留まらず、地域で共に生きる人として信頼関係を築いているスタッフの姿勢に大きな感銘を受けた。本研修は、医師として患者さんを診るという基本的かつ重要な姿勢を改めて見つめ直す貴重な機会となった。

○研修内容に対する意見

病棟および外来での診療に加え、褥瘡などの創傷処置、訪問診療、診療所での診療、超音波検査を経験した。

創傷処置では、創部を日々評価し、治癒を妨げている要因を考察した上で、適切な薬剤や被覆材を選択した。さらに、栄養状態や日常生活動作も考慮しながら治療方針を決定した。特に、湯たんぼによる熱傷に対する処置が印象的であった。外観以上に損傷範囲が広く、生活状況も踏まえて入院治療としたが、創の状態を丁寧に観察し、その時点で最善と考えられる処置を継続することで、創部は日々改善していった。創傷を局所だけでなく、患者さんの生活背景を含めて評価する重要性を実感した。

訪問診療では、患者さんが実際に生活している環境を直接確認することで、外来や病棟では得られない多くの情報を得ることができた。山間部の集落に居住する患者さんの訪問診療に同行した際には、自動車での進入が困難な険しい山中に住宅があり、訪問診療が果たす役割の大きさを実感した。また、在宅での看取りを経験し、家族に囲まれながら最期の時間

を過ごすことの尊さと、それを支える医療者と家族のサポートの重要性を強く感じた。

○今回の臨床研修で得たこと

この1か月間の研修を通じて、疾患のみを診るのではなく、患者さんの生活背景に寄り添う人としての医療、限られた医療資源の中で状況に応じて判断する総合的な対応力、そして行政との連携の重要性を改めて学んだ。一方で、自身の診療における未熟さや知識・経験の不足を痛感する場面も多く、今後さらに研鑽を積む必要性を強く感じた。梶原病院での経験は、自身の臨床力の課題を明確にするとともに、今後医師として成長していく上での大きな指針となる貴重な学びであった。

研修以外の面では、鯉のたたきをはじめとする高知の美味しい食事や、四国カルストの星空、森の中でのアスレチックなどの豊かな自然を堪能した。また、先生方や先生方を通じて知り合った友人と過ごす時間は非常に楽しく、帰るのが惜しいと感じるほど充実したひとときを過ごすことができた。

最後に、ご指導いただいた梶原病院の先生方、看護師をはじめとする医療スタッフの皆さん、多くを学ばせていただいた患者の皆さん、そして研修期間中に関わってくださった支援センターや町役場、小中学校の先生方に、心より感謝申し上げます。今後はよき心臓外科医となれるよう、梶原での学びを胸に刻み、日々精進していく所存です。ありがとうございました。